

稱讃

二八五号

二〇二六年九月一版発行



発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

メール shousanji@festa.ocn.ne.jp

こしょうしょうひ

み

小慈小悲もなき身にて

うじょうりやく

有情利益はおもふまじ

によらい がんせん

如来の願船いまさずは

くかい

苦海をいかでか

わたるべき

『正像末和讃』悲歎述懷讃

この夏、熊本地震の後も千葉や能登半島で大雨による洪水被害が起こったり、世界でもコロナ肺炎で大地震、ネパールでは、温暖化による氷河の土石流が発生し、甚大な被害を蒙って多くの方々がお亡くなりになり、行方不明になっておられます。

熊本地震発生から一月経たない時、私の兄・鹿兒島稱讃寺住職の坊守の従弟（熊本の本派



寺院住職）が往生の素懷を遂げました。

生前は、「念仏者九条の会」に加わり、非戦・

平和を呼びかけていましたし、自然災害に遭われた方々の支援を続けておられました。

浄土真宗のお寺の住職として、お念仏の教えを聞く中で、本願力に遇われていたからこそなのだろうと思うのです。だからこそ、自分はそちのけに他の人のための行動に一所懸命であられたようです。がんを患ってから徐々に我が身の寿命を受け容れていかれ、亡くなられる前に、ご両親にお礼のご挨拶をなされたとのことであります。

世界では、今も戦争で多くの方々が犠牲になっておられます。また多くの方々が天災人災で被災されたり、お亡くなりになっておられます。病気で事故でも世界中どこかで、毎日、多くの方がお亡くなりになっていきます。

ニュースなどでそのようなことを見聞きし、心痛め、哀れみ、悲しむ、私たちです。何か支援したい、寄り添い、育もうと思う。また、近しい方、親しい方の死を悔いり、悲しみ、愛おしむ私たちです。それらが、私たちの慈悲、人倫的、人道的なものであります。これは慈悲の中でも「小悲」と言われるものです。この「小悲」を「衆生縁」とも言います

2026（令和8）年度 稱讃寺門信徒会費 年会費 6,000円

①城北信用金庫一ツ家支店

名 義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会
代表 北村信也
口座番号 普通 6176051

②ゆうちょ銀行 店名四四八

名 義 キタムラ シンヤ
口座番号 普通 2374851

稱讃寺

秋季彼岸会法要のご案内

日時 九月二十三日（水・祝）

午後二時～午後四時

日程

一三：〇〇 門徒総代会

一四：〇〇 おつとめ

○御本典作法 調声

（お焼香）

○宗祖讃仰作法を基に
正信偈（十二礼節）

一四：四〇 法話 住職

一五：三〇 茶話会

一六：〇〇 恩徳讃 解散

※お盆法要をしませんでした。皆さまの
ご参拝を心よりお待ち申しあげます。

衆生縁の慈悲とは、私たち生きとし生けるものが抱く「助けたい」「助けよう」「救いたい」「救おう」と思うことと思ひ込んでおります。

または、「小悲」だから安っぽいものと思ひ込んでおります。とんでもないことです。思ひの如く助けることなど到底出来ないのです。

親鸞聖人は「小慈小悲もなき身にて 衆生利益はおもふまじ」と謳っておられます。ただ単にご自身を卑下されているではありません。

親鸞聖人は御和讃で、

願作仏の心はこれ
がんさぶつ しん

度衆生の心はこれ
どしゅじょう しん

度衆生の心はこれ
どしゅじょう しん

利他真実の信心なり
りたしんじつ しんじん

『高僧和讃』天親菩薩讃と謳われました。「度衆生の心」とは、先に述べた「衆生縁の慈悲」であり、「度する」のですから、迷いの世界から悟りの世界に渡す（済度）する、渡したいという私（衆生）の「心」を表してあります。その「心」を親鸞聖人は、「願作仏心」と言つて、阿弥陀さまの「他力の菩提心」と言い、「極楽に生れて仏にならんと願えとすすめたまえるところ」だとされました。

つまり、阿弥陀さまのお心が、先に「浄土に生れて仏になりたい」「生死の苦海を越えたい」と勧める根本の思ひを私に現われたところが、他の人を「助けたい」「救いたい」という

「心」なんだと言うことではないかと思われまふ。

「心」と表現された心は、阿弥陀さまのお心を指しております。「心」と表現されたところは衆生（私）の心を指しております。また、次の御和讃も謳っておられます。

往相回向の大慈より
おうそうえこう だいじ

還相回向の大慈をう
げんそうえこう だいひ

如来の回向なかりせば
にょらい えこう

浄土の菩提はいかがせん
じょうど ぼだい

『高僧和讃』天親菩薩讃「この二つの和讃の意は、「阿弥陀さまのあなたをお浄土に生れさせ、必ず仏にします」という往相回向の大慈が、私に他の人々のいのちを救いたいとの心を起させてくださっている。その心こそ、実は阿弥陀さまの還相回向の大慈であります。私がその方のいのちを救いたいと思つたそのいのちこそ、既に仏さまのいのちであり、私に「生死を越える」唯一の阿弥陀さまのご本願のはたらきを教えてくださっていると窺えられないでしょうか。

親鸞聖人は、自身が他人のことを憐れみ、悲しみ、育み、助けたいと思うところが起るのも、阿弥陀さまの他力のはからいであると受け取られたのであります。だからこそ、小慈悲さえも自身の心が起したことではなく、自分にはそういう心さえ無いからこそ、阿弥陀さまのお心（浄土の慈悲）を讃えられたのであります。

特集 金子大榮師のご領解

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

二四 涅槃の期待

本文 まことにしんぬ。弥勒大士、等覺金剛心をきはまるがゆへに、竜華三会のあかつきに、まさに無量覺位をきはむべし。念仏の衆生は横超金剛心をきはまるがゆへに、臨終一念のいふべ、大般涅槃を超証す。かるがゆへに便同といふなり。しかのみならず金剛心をうるものは、すなはち韋提とひとしく喜悟信の忍を獲得すべし。これすなはち往相回向の真心徹到するがゆへに、不可思議の本誓によるがゆへなり、と。

口語訳 真に知る。弥勒大士は等覺(さと)りちかき(の)金剛心を窮めているから竜華三会の曉に無上覺(さと)り(の)座につかれるのである。しかるに念仏の衆生は、横超の金剛心を獲るから臨終一念(このよのおわり)の夕に大涅槃を証るのである。それ故に「便ち弥勒と同じ」という。そのみではなく、金剛心をうるものは、韋提希と等しく即ち喜・悟・信の忍を獲得することができる。これすなわち、往相回向の真心が徹到するからであり、不可思議の本誓によるからである。

一

王日休のことばから、いろいろとおもひあわされた「信心の行者は弥勒と同じ位である」というよう(こ)びをここで結ばれたのである。これは余程ふかい感激であつたにちがいない。自力の修行にも金剛心というものがある。それは自利利他の徳を満足して、いま一息で成仏するという等覺の位においてである。その位になればいかなる障がいにも壊られることのない金剛心を得るのである。しかし弥勒は現にその等覺の金剛心をきわめている。だから五十六億七千万年の後の世には、兜率天宮からこの娑婆界へと下生し、竜華樹の下に成仏の名告り(を)あげ、そこで三会の説法をせられることになつてゐるのである。それは釈迦が菩提樹の下で成仏し(一)会の説法をせられたと同じ方式である。

しかるに念仏の衆生には金剛の信心をいただいてゐるから、已に人生を超越する道を身につけてゐる。したがって一生凡夫でありながら臨終の一念には大涅槃を超証することができるのである。その方式はまったく異なりつつしかもその徳は弥勒と同じである。それが王日休の便同弥勒といえる意味である。

そこにあたえられてあるものは、等覺の弥勒と念仏の衆生とは同位、同格であるということである。されどそれはただ名だけの同位、同格ではない。已にいうように信心の行者は「韋提とひとしく喜悟信の忍をうる」のである。現生にこの徳を与えられるから来生のさとりに疑いがない。これすなわち念仏往生と決定するものは如来の真心の徹到せるものであるからである。またこれ不可思議の本願によることである。それなればこそ念仏の信心には自利・利他の徳ありて、弥勒と同格であることができるのである。

二

この親鸞の述懐において、もつとも心ひかれるものは、「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」ということばである。これこそは「無明煩惱われらが身にみちみちて欲もおほく瞋り腹だちそねみねたむ心多く間(ひま)なくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえず」とおもひしめるものにとりての無上なる安慰となるものである。それはいくたびもくりかえすことながら、「長き迷いも今生を限りとして」という落着である。この涅槃への期待が、業苦の人間生活に喜忍をあたえ、「名残を惜しむ」したしみをも感ぜしめるのである。

この感情は「臨終に正念を期す」るものと似てゐるようで、実はまったく異なるものである。臨終に正念でありたいということとは、人生の終りを全うしたいということであつて、それは人情の自然でもあらう。されど死の縁は無量であるから、いかなる苦悩を受けて見苦しい終末になるかもしれない。さらに来生も今生もつづきとおもうものにとりては、臨終正念ということとはぜひとも、要求せられることであらう。そこから来迎を待つということも願われたのである。されどその来迎を待つは自力の行者であり、臨終の正念を願うものは真実の信心なきものと説かれている。しかれば臨終に涅槃を期する心は、それとは相反するものでなくてはならない。それは来生を今生のつづきとおもうてゐるものではないからである。

人間を動顛せしめるものは、死に待たれてゐるということである。それが一転して死に待たれてゐるということが人間に寂かなる安慰をあたうるものとなる。そこに信心を得たる身の福德があるのである。しかしそれによりてまた人生についての正念をあたえられるのである。臨終に正念を期する

ではない。正念が涅槃を期する心からあらわれるのである。煩惱の生活においても正念を失わない。それはやがて死が来るという涅槃への期待が、動乱する心を正念に立ちかえらしめる縁となるからである。

したがって涅槃への期待は不死を続生に求めるものではなく、かえって永遠を現生に内感するものである。しかるにその永遠を現在において内感するということは聖道のさとりであり、また種々の道において求められている静寂ということも、その他にはないのであらう。禪室における寂かき、それは生死を一如とする境地である。それどそれは一時(ひととき)か、終生か、かならず身を俗界から離れしめねばならない。したがってそれは煩惱を断じての涅槃というのであらう。

いま親鸞に述べられていたものはそれではない。煩惱の生活の臨終に期せられている涅槃である。それは煩惱いよいよ興隆にして、得涅槃のようこびいよいよ深いものである。それが「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」ということばの与える感銘である。

三

しかるに涅槃を臨終に期待するものは、たえがたきものとしての人生観をもつものである。したがってただ生きるよろこびのみを感じ、または既に幸福の身にあるものには通用しないことであるかもしれない。されどそれらの人びとにありても「死」は暗いものであることは間違いない事実であらう。知性は来生を否認する。それどそれは死の暗さを除くことにはならない。死の暗さは来世の有無を分別する知性にかかわらず臨終の夕べに黒ずんでいる。それはまことは広さも深さも知らない大暗

黒である。

されど「本願を信じ念仏もうす」身には、その大暗黒を限りなく照破する光が感ぜられる。その光は人間の愛と憎しみを解消して一如に帰せしめる境地を見せしめる。そこを仏教では浄土と説いたのであった。愛憎の人間業を浄めたる境地(土)であるからである。それを「親たちの世界」とも呼んで来た。「親たち」とはしたいものの呼び名であるから、われわれの思い出にあらわれるすべての人びとを指すものである。

思い出の世界にある人びとは、この世を去ったものにはちがいはないが、だからといって亡くなったものではない。かえって永遠に生きている人びとである。しかしてそこへ、われらもまた臨終の夕、往生せしめられるのである。

わたしはこれを知識として説いているのではない。ただ敬虔感情において語ったのである。しかし敬虔感情は決して無知なるものではない。真実にうなずき如来の願心を了解することにおいて智慧をそなうるものである。それが智慧の念仏といわれ、また信心の智慧といわれているものである、その智慧こそは知識よりも根本的のものといわねばならぬものであらう。敬虔感情を根底としない知識は善いものではない。ただ念仏に受容せられる思想のみが真実である。

したがって敬虔感情を表現してのことばは、知識分別による思想と同視せられてはならない。おそらく仏教、とくに浄土の教説は、すべて敬虔感情の智慧によりてのみ了解せらるべきものであらう。しかるにそれが知識に分別されて、往生浄土の教は無学文盲の者の信仰であるということになった。されど知識人は必ずしも敬虔感情をもっておらないように無学文盲の者には真実が了解されぬという

ことはないであろう。敬虔感情は原始人にもあるにちがいはない。それは人間にとつて原始的なる感情であるからである。

わたしはこの感激において、いますこし興奮している。しかして老いてゆく身において臨終一念の夕べは親たちの待つ光の世界であることに寂かなるよろこびをおぼえる。親鸞の心境にも、それがあつたのではないであらうか。

四

ここであつたしはまた「空手にして故郷に帰る」ということばを思い出した。故郷へ帰る心安きは空手で父母に迎えられることにあるのである。立身出世の道を失つても郷里へ帰れば山河は大手を上げて受け容れてくれる。それが親たちのある故郷のありがたきである。

とはいえ、この世にある親たちには、親たちのよろこぶものを身につけて帰るということも自然の感情であらう。立身出世というようなことでも、真二心からよろこんでくれるものは親たちである。さらには郷里の人びとであるということもできるであらう。されど彼(あ)の世の親たちに見(まみ)えるためには、何が必要なのであらうか。

ここには「臨終の夕」に立ちて自身の一生を回顧するということが行われる。幾山河を経て来れる一生である。思い出としてのこるものはただ愚鈍のゆえに煩悩んで来たということの他ないようである。

とすれば、まことに「不可思議の弥陀の誓ひのなかりせば、何かこの世の思い出とせん」というの他ないのである。しかしてその思い出のみが、また、あの世の親たちに見(まみ)える心となることであらうか。浄土は家郷であると教えられて来た。その家

郷へと空手にして帰らしめられるのである。したがって臨終の一念に立ちての一生の回顧は、ただ懺悔の他ないのである。しかしてその反面にあるものは、身辺の人びとに対する感謝である。広くはこの世において作りし業の懺悔とこの世にあらしめられた有難きである。

その懺悔の水が一生の業苦を洗い、その有難きの光が煩惱の水を解いて、「大般涅槃を超証」せしめるのである。これすなわち念仏の徳が臨終一念の夕べを機縁として明らかに身証せられることではないであらうか。

五

これすなわち、「往相回向の真心徹到するゆへ」である。ここに、「真心徹到するひとは、金剛心なり

ければ、三品の懺悔するひとと、ひとしと宗師はのべたまふ」とある和讃が思い合わされる。真心が煩惱の身に徹到するとき、そこに懺悔があらわれるのである。こうして煩惱の一生が懺悔の思い出となりて涅槃するのである。それこそ善導によりて悟忍といわれたものである。念仏者は何を悟るか。人生は業障懺悔の場であつたと悟るのである。

しかしてその業障の懺悔において、万人帰一の浄土が見開かれる。それは懺悔の心は自他を分かつものではないからである。懺悔とは自善多非の心を翻すものである。何をか懺悔する。自善他非の心を懺悔するのである。したがってそれは自利してのち利他することはないであらう。ただ自他ともに如来の悲願に救われる道を求むる他はないのである。

弥勒は自利してのち利他する道を求めた。あるいは自利を捨てて利他の行を修めたのであらう。それが竜華三会の暁を待ちて成仏することになった

のである。

しかるに念仏者は臨終一念の夕べに大般涅槃を超証するのである。これ自利利他を同じくせしめられる「不可思議の本誓による」からである。

敬虔感情とは

敬虔感情(けいけんかんじょう)とは、神仏や崇高な存在、あるいは死者に対して深く敬い、慎み敬う宗教的・道徳的な感情のことです。

主な意味と特徴

○神仏への信仰! 神や仏を深くうやまい、心から仕える尊い気持ちを表します。

○法律上の保護・刑法上の「死体損壊・遺棄罪」などにおいて、社会一般が死者に対して抱く宗教的・敬う感情(公衆の敬虔感情)の保護客体としても言及されます。

※神仏を信じない者でも、敬虔感情は起こりますかと、AIに尋ねてみました。

〈AIの回答〉

神仏を信じない者(無神論者や不可知論者)であっても、敬虔感情はおこります。

敬虔感情の本質は、必ずしも特定の「人格神」や「宗教の教義」を信じることだけに縛られません。神仏を信じない人でも、以下のような対象や状況において、同様の深い畏敬の念や慎みの感情を抱くことが知られています。

神仏を信じない人に生じる敬虔感情の対象

○大自然や宇宙の営み: 圧倒的な大自然(巨木、大連峰、満天の星空など)や、生命の進化の歴史、宇宙の広大さに直面したとき、自分の小ささを自覚し、言葉にできない「畏敬の念(オウ/Awe)」を抱くことがあります。

○死者への尊厳: 特定の死後世界や神仏を信じていなくても、亡くなった人の遺体や遺骨、墓所に対して「静かに冥福を祈りたい」「荒らしてはならない」という強い慎みの感情が働きます。これは日本の法律(刑法)でも、全社会的な道徳心として保護されています。

○偉大な人類の業績: 歴史的な芸術作品、美、あるいは先人たちの自己犠牲的な精神や倫理的な生き方に触れたとき、深く心を打たれ、うやまう気持ち湧き起こります。

○心理学や脳科学の視点

近年の心理学では、こうした感情を「超越性(Transcendence)」や「自己超越」という概念で研究しています。これは特定の宗教を持たなくても、人間が「自分よりも遥かに大きな存在や、つながり」を前にしたときに自然と抱く感情であり、メンタルヘルスや幸福感を高める普遍的な心理機能とされています。

神仏を信じない方でも、日常の中で「言葉にならない厳かな気持ち」になった経験があるかもしれせん。

浄土真宗のビハーラケアを考える

仏教文化研究所主催シンポジウム

「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長―スピリチュアルケア―」

シンポジスト

前埼玉医科大学教授	渡辺 孝子
飛騨千光寺住職	大下 大圓
龍谷大学教授	鍋島 直樹
武蔵野大学教授	種村健二朗

●大下大圓氏（飛騨千光寺住職）

「がんばるのも悪くない」縁生の力」

大下 私は今、京都大学の研究室、「こころの未来研究センター」というところにいるのですけど、ひらがなで「こころ」と書くのですね。漢字で心と書く、どちらかというと「心理」になるのですね。心理よりも、もうちょっと大きな意味が、そのひらがなの「こころ」なんです。これはやはり、人とスピリチュアリティを表している。「こころ」といった場合は、ひとつの霊的な側面をもった言葉ではないかなと思います。日本ホスピス在宅ケア研究会のスピリチュアルケア部会では、ひらがなで「たましい」にしようではないかという意見もだいた出たのですけれども、これも全体的な合意にはならなかったのです。今はまだ議論の最中だということを皆さんも考えていただきたいと思います。

スピリチュアルというのは、宗教的と同じ意味で

はなくて、人間の生の全体図を構成する因子というふうにはWHOでは提案しています。ピーター・ケイという人が言った「スピリチュアルな痛みとは一体何なのか」というところなのですけれども、まず、不公平感です。「なぜ私がこんな病気になってしまったのか」、「私は人のお荷物なんかにはなりたくないよ」、「死んだほうがましだ」、「何をやってんだめだ」、「罰が当たったのではないか」、「誰も本当のことをわかってくれない」、「私は孤独だ。私は臆病者だ。弱い人間だ」、「誰も救ってくださらない。正しく人生を送ってきたのに。なぜ神様や仏さまはこの苦しみを見逃しているのか」、「私の人生は無駄だったのだ」というようなことが、スピリチュアルペインに相当するというふうにも言っています。痛ましい思い出とか、忘れたい思い出、あるいは罪悪感、達成出来ない、といったこと、孤独や悲しみ、怒り、羞恥心、将来への不安や絶望、恐れ、虚無感。こういったものが、スピリチュアルペインの内容にあると言われています。

仏教では昔から、四苦八苦ということを言ってきましたよね。これは皆さん、わかりやすい言葉ですよ、四苦八苦。「何のために四苦八苦しているのだ」などとよく言います。四苦はわかります。生れてくること、歳をとること、病気になること、死ぬということ。求不得苦、怨憎会苦、愛別離苦、五陰盛苦というようなことです。逢いたい人ともう逢えないとか、求めたいのに得られないとか、悲しくて別れなきゃならない、愛する人と別れなきゃならないとか、ね、この肉体的なものに執着するところによる苦しみたいなもの、この、四苦八苦というものが仏教の根底の中にあります。でも仏教はですね、なんかこう、苦しむっていうのを痛みつけて一点ではなくて、ドゥツカ(dunkha)と云います。

しょうかね、思い通りにならないということが苦しみと捉えています。思い通りに、自分のなんとかしたいということが、それが達成できない、思い通りにならないのだということ。そういうところから、諸行無常とか諸法無我という言葉が出てきますよね。ですから、そういう大自然の大きな真理を変えようなんていうたってそれは無理なのだと。川の水を川上から川下に流れていくのを反対にさせようなんていう、まあ科学的にいろいろやろうとする試みがあるかもしれませんが、そういう宇宙の真理は人間の浅知恵によって変えることは出来ないのだということに対して、「なんとかしたい、なんとかしたい」と思ってしまったら私がいるという、その思い通りにならないということが実は苦しみなのだ、というふうに仏教は捉えています。

ひとつの症例を紹介させていただきます。（映写）これはご本人への倫理的な配慮として、家族のご了解を得て使わせていただいています。私の本の中にも紹介している船越さん（仮名）の例です。この方が、四十三歳のときに車の事故で頸椎を損傷し、悩への血流が悪くなって、全身麻痺してしまつた、つまり身体が一切動かなくなつてしまつた。意識状態は清明であり、目も見えて耳も聞えるのに身体が一切動かない。そういう状態で、ベッドの上で何年寝ていたかというと、二十年間ずっとこう、身動きできない状態で、天上ばかりを見ていたという。この患者さんに、私は八年間関わらせていただいた。この患者さんに会ってから、私は人間の深いところの苦しみということを教えられたわけですね。目だけしか動かないということで、目の動きで、その人の言いたいことを、聞かせていただくのです。「あいうえお」の文字盤を作つてその文字盤ひとつひとつを、目の動きで探していくという非常

に時間の時間のかかる作業をしながら、想いを聞かせていただくのですけれども、あるときこの人が「死にたい」というメッセージを出されたのですね。その「死にたい」というのを、この人の極限状態の心理状態であつたというふうに思います。死にたいのに死ねない。自分で何にもできない。でも生かされているというその状態を、自分人間として生きている価値はもう何にもないのだということを、一生懸命私に訴えてくるわけですね。そういうことに對して私は初めにどんなふうに関わろうとしたかというと、「がんばれ、諦めるな」と、まさに声援だけ送ればいいんじゃないかというふうな、一方的な、こちら側の都合で、その人を元氣付けることがとても大事なことだというふうな、そんな位置にあつたわけですね。挙げ句の果てには坊さんだから説教せんとあかんのではないかみたいな、まさに高慢な態度で、本当に愚かな自分があつたわけなのです。そういう関わりではなくて、本当にこの人の中に、「死にたい」という想いはどこから出てくるのだろうか。なぜ、その人が「死にたい」と思うのかということ、やはりしっかりと聴いていくことが、この人にとっては重要な関わりでありました。

こちらがその当時の院長なのですけれども、でもこれは最後の写真でした。種村先生に入って、写っていたいただいたこれは最後の写真で、この翌年に亡くなられてしまうわけですね。そういう状況のときでした。この人が「生の音楽を聴きたい」というようなメッセージを出されて、私たちが、ボランティアとしてコンサートを開くということもありました。このときから音楽治療を私は勉強し始めたわけですね。そして、この人自身が家に帰りたいという希望をもつていらつしやいまして、それをなんとかみんなで支えようということ、家族の了解と協力、医療者、病院の了解を得て、この人は十五年ぶりで自分の家に帰ることができたのです。〈映写〉懐かしい家の中にこの人が入ると、近所の人たちが集まってきました。今でも忘れませんが、この赤いエプロンをかけたおばちゃんは、自分の家じやないのに、自分のうちのようにしてどかどか入ってきたとして、それでなんて言ったかという、びつくりするような言葉を言ったんです。こういう言葉です。「あら、あんた死んだんじやなかったの？」って。よくそんなこと言うなあと。私はもう、固まってしまうくらいに、ほんとにすごい表現だった。普通言えません。こんな言葉。でもしやあしやあと言っていたこのおばちゃんとの関係はなんなのだろうと思つたら、実は、この人とは幼馴染みで、小さいときから一緒に、ばんばんと悪口でも言い合える関係だった。つまりこの人が家に帰らなかったのはもちろん家族にも会いたいということもありましたけれども、こういう一緒に地域で暮らしてきた人たちと、会いたいという想いもあつたわけです。さらにこのおばちゃんにしてみればですよ、あんたはそんな重症の、末期の状態かもしれないけど、私は昔とちつとも変わらないんだよと、あんたがここ

に住んで一緒に暮らしたときとちつとも変わらないんだ、だから私はそのまんまの調子でお話しているんだよっていう、まさにこのおばちゃんのやさしさだったっていうことが、後からだんだんわかってきた。ああ、この人はすごいケアをしているな。て私は思いました。だから、ケアしているのは、専門釋だけがやるのではなくて、いろんな人が、いろんな関わり方をするのでいいのじやないかと思ひました。そして特にこういう地域という中に、小さいとき一緒にいて、いろんなことを分かった人たちが、そういうことに参加することによって、この人のところが開かれていき、思い出して「こんな時期があつたな」と自分を再認識することが出来るならば、いろんなチャンスがあつていいんじゃないか、そういうふうに思ひました。

また、千光寺にも来たことがあります。〈映写〉このときに、看護師さんたちと一緒にこの人のためにお経をあげるようになりました。普通お経というと、亡くなった人のためにしか皆さんはお経をあげたことがないのではないかと思いますけれども、生きている人のために、本堂でみんなでお経をあげたのです。この人が後で、そのときのことをこんなふうに言われたことがあつたんです。「おれはこのときにケアされていた」と。この言葉を聞いてびっくりしてしまつた。三メートル以上も離れているこの看護師さんに、「おれはケアされているって思っている」と感じる患者さんがいるということなのです。ね。それはどういふことかと言うと、自分のために祈ってくれている人がいる。そのことで自分のところが安らかになつていく。安心（仏教的には「アーンジン」という言葉がありますけれども）を思っている、ということ。お経というのはなくなつた人のためだけに唱えるのではなくて、生きている人のため

に自分たちが生かされているということを感じながらお経をあげるといふ、その行為がまさに、両方に、癒やし癒やされる関係性を作っているということとをこのとき発見したわけです。

この船越さんは、自分が小さいときいろいろで育ったという経験をもっているらしい。そのいろいろで育ったという経験をもう一回再現したいという本人の希望もあって、お寺の囲炉裏で火を焚いたわけです。

このときにこの人は、自分の小さいときの事をずっと振り返られて、ああ、俺もあんなときあったな、家は貧乏で貧しかったけれど、あそこで走り回って、親に叱られたりした。でも学校に行くようになると、母ちゃんが朝早く起きて、俺たちのために朝ごはんを作って食べさせて行かせてくれた。家で作った豆で味噌汁を作って、あそこで味噌汁を作って食べさせてくれた。大根の味噌汁や芋の味噌汁はうまかったなあ、父ちゃんが川で魚を釣ってきて、あそこで焼いて俺たちに食べさせてくれた。父ちゃんが釣ってきてくれた魚はうまかったなあ。このようなことをこの人が六十歳になってから、思い出して、回想して、そして、自分にも幸せなときがあったのだ、生き生きと人間として一生懸命生きていた時期があったのだ……そういう自分を発見した。そしてまさに、自己との折り合いをつけられていた。そして生きるといふ意味を、もう一度このときに見直された瞬間でありました。

私たちが、また船越さんを病院に連れて帰り、看護師さんが処置をし、ボランティアも遅いから帰るよといつて帰ろうとしたときに、この人がとんでもない言葉を「あいうえお」の文字盤から言ってきたのです。なんて言ってきたかというところ、こういう言葉です。「生きていて良かった。もっと生きたい」

と。こういう言葉を私が聞いたときに、もう胸が震える思いでした。生きていて良かったと、どうしてそんな言葉を出せるのだろうか、こんな極限の状態にある人から出てくる言葉だとは信じられなかったのです。しかしこの人の言葉は真実でした。しかもそれは、家に帰れたということもあったのですけれども、実は私たちの関わり方を見ていたのです。それは普通の人として関わってくれた、ということなのです。あんたかわいそうだなやな。あんなそんな障がいや病気になって気の毒な人やなか、そんな上から見るようなものの見方で関わられたらうれしくないでしょうか。いや、ほっといてくれって言いたいですよ。この人は、私たち自身みんなが友だちとして、出会った縁ですよ。たまたま会ったのです。これは良いとか悪いとかじゃなくて仏教的に言えば、縁なのです。縁があるから出会ったわけですから。その縁を大事にして関わっていった、それだけのことなのです。それによってこの人の中に、あるいは私たちがこの人から教えられるものが多かったということです。

私がそういう意味で縁ということを学び始めたのは、仏教を勉強し始めてからです。(映写)これは随分前の私の写真でございませう。一九七四年、スリランカで半年間、スリランカのお坊さんになって、向こうのシャマタ(Samatha)とか、ヴィパッサナー(vipassana)という、瞑想を学びました。中国ではそれは「止観」と訳されますけれども、その瞑想の中で他者との縁を感じていく、様々な瞑想法があるわけです。お釈迦さんは、私たちに自灯明・法灯明ということをお教えられた。自分の中の苦しみや悲しみが、全部自分の中にあるのだよ。まさに自分の中に解決するプログラムが含まれているという

こと。それがわからないときに、「法」(dharma)を手本にしようよ、ということが随所に出てきます。ですから、仏教の基本的なスタイルは自灯明・法灯明といわれています。私の苦しみは、私のものであります。そしてその苦しみは私が成長するためにいたっているのです、という捉え方。そしてそれがわからないときに、「法」(dharma)という、ダルマを鏡として生きることなのだ、ということをお釈迦様は、残されていく私たちに教えてくれたわけです。それを後には、仏教では唯識という心理学的な考え方があって、そこには自分の人間の身体、五感だけではなく、そこから派生するところの様々な六感、第六感と言っている意識の世界、末那識、阿頼耶識というような、第八識というものが説かれています。さらに後には、阿摩羅識とか、華嚴経とか、あるいは密教になりますと、十識という表現をしています。さらに弘法大師は、人間の心を十の段階に分けて、秘密曼荼羅十住心論という本の中で、そういう展開をしています。要は、自分という心が、どこに向かっていくか。それは自分の心を解放していくためには、まさに、法界、宇宙意識に自分の心を目指して、そこに繋げていくことによって、小さな自分ではなくて、大きな自分を感じ取っていくという作業ではないかなというふうに思います。その境地のことを、無我と言ったり無自性と言ったり、色々な解釈の違いはあるかもしれないけれども、自分にとらわれない自分になっていくというところに仏教の救い、あるいは解放というものがあるのではないかなと思います。(つづく)

※大下先生のお話が次回も続きます。また、大下先生は真言宗のお坊様ですので、聖道門の教えが基本になっておられますことをご理解ください。